

小野ゼミ症候群

第13期 長妻 泰成

「このフォントは、HGP 創英角ゴシックだな」あらゆる文字を見ると瞬時にフォント名がわかってしまう。「乗る」と「乗車」でゆらぎだな」あらゆる表記を見るとゆらぎを探してしまう。これらは、小野ゼミに入ってから資料作成や論文執筆を通じて自然と身に付いてしまった症候群の現れである。これらは、にやけてしまう程、お気に入りの症状なのだが、小野ゼミ生ではない人からすると、「気持ちわるっ」と思われても仕方ないものである。2年間のゼミ活動を通して身に付いた病気は小野ゼミを離れ、時間の経過とともに自然治癒していくだろう。症候群との別れを思うと寂しい気持ちであるが、私にはこれから先、絶対に治ってほしくない、いや一生付き合っていきたい症状が1つある。それは、「最後まで頑張り抜く姿勢」である。

今思い返すと、小野ゼミに入る前の私は、何をやっても「まあこれくらいでいいだろう」と自分自身に妥協して生活していたのかもしれない。そのため大学1,2年次の成績は、とにかく酷いものであった。入ゼミ試験では、小野先生に「なぜ勉強しないのか」ということを指摘され、その問いに対して上手く答えられない自分がいた。当時は自分でもなぜ頑張り抜けないのかを分かっていなかったのである。

その答えが分かったのが三田祭論文での経験である。三田祭論文の活動がスタートし、大きな壁にぶち当たった。テーマが全く決まらなかったのだ。テーマ発表がある本ゼミの前日にも決まらずメンバー全員が途方に暮れる中、私はメンバーに対して「明日までに間に合わないことを先生に謝罪し、期限を延期してもらおう」と提案したのだった。メンバーは覚えているかわからないが、私が「逃げる」選択肢を取ったのだった。しかし、小野先生に電話したところ、その提案に対して「間に合わないと決めつけるんじゃなく、今日本気で頑張ってみたら」と言われたのだった。その時、自分の弱さを初めて自覚した。恥ずかしかった。私は壁にぶち当たる度に、その壁を真正面から乗り越えるのではなく、壁の抜け穴を探すというカッコ悪さがあったということ。この経験もあって、自分の弱点を克服するため、三田祭論文や入ゼミ代表、卒業論文とあらゆる活動を、周りの力を借りながらも、最後まで頑張り抜いた。そのおかげで私はどんな困難に対しても、諦めるのではなく「まだできることはあるはず、とにかく頑張ろう」と行動する症状が身に付いたのである。この症状を身に付けることができたのは、小野ゼミのおかげである。なぜなら、同期、後輩、先輩、大学院生、そして何より小野先生という、最後まで諦めることなく一緒に頑張ってくれる仲間や先生に囲まれて、質の高い活動をすることができたからである。

4月から社会人として新たな生活が始まる。冒頭にも言った通り、小野ゼミ症候群の多くの病気は、自然治癒するだろう。しかし、「最後まで頑張り抜く姿勢」だけは治すことなく、一生付き合っていきたい。